

日本ロシア文学会

関東支部報 No. 40 (2022年5月)

〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1 早稲田大学文学学術院 八木君人研究室気付
日本ロシア文学会関東支部事務局
E-mail: kanto.yaar@gmail.com

【ご挨拶】

来る2022年6月4日(土)12:30より、昨年度と同様、ZOOMを用いたオンラインの形で、日本ロシア文学会関東支部研究発表会を開催いたします。8本の修士論文成果報告と、1本の博士論文成果報告がおこなわれます。その後、支部総会も開催する予定です(残念ですが、懇親会はありません)。参加ご希望の方は下記URLのしめす申込フォームに必要事項をご記入のうえ送信してください(登録完了後、zoom接続情報等を含む確認メールが届きます)：

<https://zoom.us/meeting/register/tJErceyrrDIpHNJqEIW0infu6Zxfkin6lyuC>

本報に発表要旨を収録しております。どうぞふるってご参加ください。

沼野恭子

【研究発表会プログラム】

12:30 開会：支部長挨拶

[修士論文成果報告]

- 12:40-13:10 堤 縁華 (東大院) 司会：五月女 颯 (日本学術振興会特別研究員 PD)
「ナショナリズム・故郷・誠実さ：
アクラム・アイリスリの創作に見るソ連文学の遺産とポスト・ソ連のアゼルバイジャン」
- 13:15-13:45 佐野 晃 (筑波大院) 司会：佐山 豪太 (上智大)
「ロシアにおける日本語学習動機の意識調査——テキストマイニングによるWEBコメントの定量分析——」
- 13:50-14:20 永田 怜絵 (東大院) 司会：番場 俊 (新潟大)
「ドストエフスキーの作品へのアフェクト理論(情動論)の応用
——『弱い心』、『ステパンチコヴォ村とその住人』を中心に——」
- 14:25-14:55 濱田 玲央 (東大院) 司会：大山 麻稀子 (神奈川県日本ユーラシア協会副会長)
「ガルシンの戦争作品群における人々の苦しみの研究」
- 15:00-15:30 土田 真紀子 (東外大院博士前期課程修了) 司会：佐藤 千登勢 (法政大)
「映画におけるニコライ二世の表象とその社会的受容——アメリカとロシアの比較——」
- 15:35-16:05 沖 隼斗 (早大院) 司会：斉藤 毅 (大妻女子大)
「詩人の再出立——ボリス・ポプラフスキー「ヤルタからの出立」をめぐって」
- 16:10-16:40 金丸 駿 (早大院) 司会：鈴木 正美 (新潟大)
「イーゴリ・ホーリンの初期バラック詩篇における語りの問題」
- 16:45-17:15 藍 孟昱 (創価大院) 司会：貝澤 哉 (早大)
「ジラールの欲望の三角理論およびジジエックとクリステヴァの精神分析理論から見る
ロマン・ポランスキー作品の研究」

[博士論文成果報告]

- 17:20-17:55 安野 直 (早大) 司会：久野 康彦 (青山学院大)
「20世紀初頭のロシアにおける女性向け大衆小説とジェンダー」

18:00-18:30 支部総会

日本ロシア文学会 関東支部報 第40号

目次

【支部長 巻頭言】

沼野 恭子 「文化の越境性」 3

【研究発表会 報告要旨】

[修士論文成果報告]

堤 縁華 「ナショナリズム・故郷・誠実さ：アクラム・アイリスリの創作に見るソ連文学の遺産と
ポスト・ソ連のアゼルバイジャン」 4

佐野 晃 「ロシアにおける日本語学習動機の意識調査——テキストマイニングによる
WEB コメントの定量分析——」 5

永田 怜絵 「ドストエフスキーの作品へのアフェクト理論（情動論）の応用
——『弱い心』、『ステパンチコヴォ村とその住人』を中心に——」 6

濱田 玲央 「ガルシンの戦争作品群における人々の苦しみの研究」 7

土田 真紀子 「映画におけるニコライ二世の表象とその社会的受容
——アメリカとロシアの比較——」 8

沖 隼斗 「詩人の再出立——ボリス・ポプラフスキイ「ヤルタからの出立」をめぐって」 9

金丸 駿 「イーゴリ・ホーリンの初期バラック詩篇における語りの問題」 10

藍 孟昱 「ジラールの欲望の三角理論およびジジェクとクリステヴァの精神分析理論から見る
ロマン・ポランスキー作品の研究」 11

[博士論文成果報告]

安野 直 「20世紀初頭のロシアにおける女性向け大衆小説とジェンダー」 12

【規約・執行部】

日本ロシア文学会 関東支部 規約 13

現行執行部 14

【支部長 巻頭言】

文化の越境性

沼野恭子 (東京外国語大学)

2022年2月24日に開始されたロシア・プーチン政権による無謀な戦争が、世界中にさまざまな波紋を広げている。日本でもウクライナ情勢に対する関心はきわめて高く、政府がウクライナから「避難民」を受け入れる方針を打ち出したことも関係してか、ウクライナへの共感の日増しに強まっているようだ。

一方、予想していたこととはいえ、ウクライナへの強い共感に反比例するような形で、ロシアへの反感・憎悪がさまざまな形で現れ、ロシア語、ロシアの音楽、バレエ、映画などロシア文化全般に対する排斥にまでつながるケースも見受けられる。ロシア研究者は、分断を招くそうした動きのはらむ危険性について、真摯な態度で粘り強く社会に向けて説明していくしかないだろう。

こうした状況のなか、力づけられる事象があった。

春から夏にかけて、日本ではロシア、ウクライナの優れた映画が立て続けに3本公開される。キリル・セレブレンニコフ監督の『インフル病みのペトロフ家』、セルゲイ・ロズニツァ監督の『ドンバス』、カンテミール・バラールゴフ監督の『戦争と女の顔』である。

そのうちウクライナのロズニツァは、ロシアの侵攻直後にヨーロッパ映画アカデミーが声明を出したとき、そこに反対の意志がはっきり示されていないと非難して脱会したが、やがてウクライナ映画アカデミーが「ロシア映画やロシア映画人のボイコット」を呼びかけると、今度はそれに異を唱え、3月18日に除名処分を受けた。ロズニツァの立場は、「プーチン政権の犯罪に反対を表明しているロシアの映画製作者たちのボイコットに反対する」というものなのである。

もうひとりロシアのセレブレンニコフは、5月19日カンヌ映画祭での記者会見で、反戦の意志表示をしたうえで、ロズニツァと同様「ロシアの作品をボイコットすること」に反対した。彼は「ロシア文化はつねに人間の価値や脆さを描き、小さな人々への大いなる共感を示してきた。文化は戦争に対立するものであり、ロシア語やドストエフスキーやチャイコフスキーを禁止してはいけない」と語った。

奇しくも、ウクライナとロシアの双方の映画監督が、戦争の首謀者とロシア映画人を同一視するべきではないという考えを共有したことになる(ちなみに、ロシアのカバルダ・バルカル共和国出身のバラールゴフは、3月初め、言論統制の厳しくなったロシアにはいられないとして出国した。事実上の亡命である)。

すぐれた文化は本質的に国籍や民族を越えゆくものだ。そうした「文化の越境性」にこそ、国境を無化し、憎悪を愛に、殺戮を共生に変える可能性が秘められているのではなからうか。

【研究発表会 報告要旨】 (修士論文成果報告部門)

ナショナリズム・故郷・誠実さ：

アクラム・アイリスリの創作に見るソ連文学の遺産とポスト・ソ連のアゼルバイジャン

堤 縁華 (東大院)

本発表は、2022年に提出した同題目の修士論文の第一章に基づいた報告である。本発表の対象は、アゼルバイジャンの元人民作家アクラム・アイリスリ (Əkrəm Əylisli; Акрам Айлисли, 1937-) である。アイリスリは、アゼルバイジャンの代表的な「60年代人」、「農村派」作家であったが、2012年、アゼルバイジャンとアルメニアの対立の中、同胞のアルメニア人迫害を描いた小説『石の夢 (Каменные сны)』を公開したため、「人民作家」の称号を剥奪され、現在も事実上の自宅軟禁下にある。

先行研究においては、アイリスリの事例の政治性と文学性、そしてソ連期とポスト・ソ連期の展開が断絶的に捉えられている。それに対し、本発表は『石の夢』を含むソ連崩壊後の事象を、ソ連時代の背景と接続して論じる。その理由は、ソ連崩壊前後のアイリスリの対照的な位置づけにある。

60年代は、ロシア以外のソ連構成国にとって、体制や「諸民族の友好」などの枠組み内で、ナショナルな追求が初めて可能となった時代であった。現在では国の「裏切り者」として非難されているアイリスリも、当時、ナショナルな文学の担い手であるとされていた。一方、故郷や「誠実さ」に対する関心など、アイリスリのソ連崩壊前後の創作には連続性が見られる。本発表の問いは、「ナショナルな時代」を代表したアイリスリが、ソ連崩壊後、60年代から引き継がれる問題意識をもって、ナショナリズムを批判しているという多義的な状況が、いかなる意味を持つのかということである。

問いに答えるため、本発表では、ソ連時代のアイリスリの創作を、特に「ナショナルな追求」との関係に注目しながら確認する。具体的には、(1)「ナショナルな時代」の代表作とされる短編『心とは残酷なものだ (Ürək yaman şeydir; Сердце—это такая штука...)』、(2) スムガイト事件をめぐる、アイリスリとアゼルバイジャン作家同盟の意見の分岐を浮き彫りにするバルージン＝アイリスリ書簡、(3) ペレストロイカの分断が批判され、全世界と故郷に同時的に身を置く感覚が追求される中編小説『イエメン (Yəmən; Йемен)』、を分析する。

分析の結果として、アゼルバイジャン社会におけるナショナルな追求は、「60年代」に始まり、ソ連末期に排他主義的で独立志向のものにシフトした一方、アイリスリは多民族共存を前提とした、ある意味で「60年代的」とも言えるようなナショナルな理想を持ち続けていた可能性を提示する。そのことから、現在では異端視されているアイリスリの事例が、実際は歴史的な文脈と緊密に繋がったものであり、また、今やナショナリズムの対極にあるとされているアイリスリは、むしろ、ナショナルな実現を、社会の主流とは異なる形で追求し続けていたという解釈を提示する。

【研究発表会 報告要旨】 (修士論文成果報告部門)

ロシアにおける日本語学習動機の意識調査
 ——テキストマイニングによるWEBコメントの定量分析——

佐野 晃 (筑波大院)

本研究の目的は、動画投稿サイトに寄せられたロシア語コメントをテキストマイニングの活用により定量分析し、ロシア人学習者の日本語学習に関する意識を明らかにする。

ロシアの日本語学習者を対象にした研究では、回答者が100人に満たず、質問対象者が学生に偏る傾向にある。本稿ではロシア人日本語学習者の声を SNS 空間に求め、文章データの高速解析手法であるテキストマイニングを用いることで、統計的に信頼できる大規模データを確保し、分析対象を大学生に限定しない幅広い層のロシア人学習者に向けた日本語学習動機の調査を試みる。

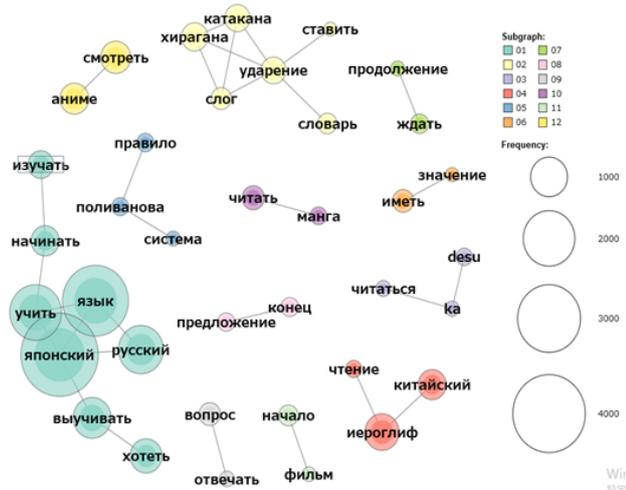
分析データに関しては、Youtube の検索エンジンで「японский язык(日本語)」と検索し、視聴回数1位から10位の動画に寄せられた379490語・43348文のロシア語コメントを対象とする。テキストマイニングツールには「KH Coder」を使用する。

分析前半の共起ネットワーク作成によって、中国語に関する語群が形成されている。形容詞の頻度順位では、14位に韓国語も登場している。しかし先行研究の質問紙には日本語を欧米の言語と比較する質問項目は用意されているが、中国語・韓国語に関する質問項目は過去一度も設けられていない。よって次に中国語と韓国語に焦点を当て、クラスター分析を実施する。

分析後半のクラスタリングによって、「漢字」・「学ぶ」などの語を媒介して韓国語・中国語が日本語と比較されており、「日本人」「中国人」「韓国人」といった民族名などを含む日中韓の間の対比もが確認できる。また、「簡単な」や「複雑な」などの単語が頻出しており、「中国語の単語を覚えるのはロシア人に難しい」や「韓国語を話すのは簡単」といった日中韓3言語の難易度を比較する発言も確認できる。

以上により、日本語に関心をもつロシア人視聴者にとって日本語の比較対象はあくまで中国語と韓国語であり、欧米の言語を日本語の比較対象としてきた先行研究が想定できなかった点が分析から明らかになった。

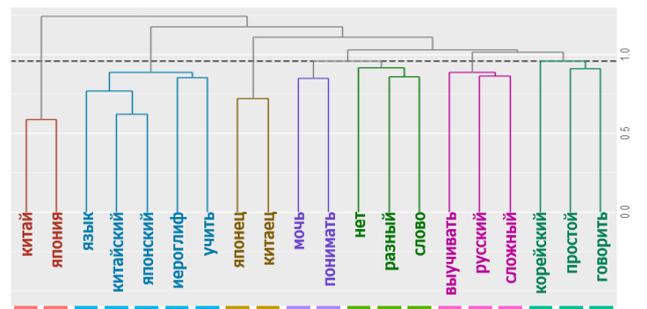
共起ネットワーク分析の結果



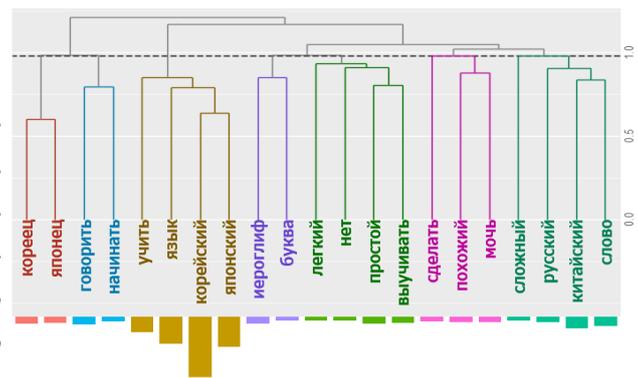
共起ネットワークで検出された単語軍の一覧

| 日本語の文法に関する単語群 | 日本語と関連性のある単語群 |
|-----------------|------------------|
| ① ひらがな・カタカナと発音 | ① 日本語を学習したい/始めたい |
| ② 疑問文「～ですか?」の表現 | ② 中国語での漢字の読み方 |
| ③ ポリバナヴァ・メソッド | ③ 漫画を読む |
| ④ 日本語の知識 | ④ アニメを見る |
| ⑤ 「です・ます」等の文末表現 | |

クラスター分析の結果(中国語に関するコメント)



クラスター分析の結果(韓国語に関するコメント)



【研究発表会 報告要旨】 (修士論文成果報告部門)

ドストエフスキーの作品へのアフェクト理論(情動論)の応用
——『弱い心』、『ステパンチコヴォ村とその住人』を中心に——

永田 怜絵 (東大院)

本発表では、アフェクト理論(情動理論)を用いてドストエフスキー作品『弱い心』、『ステパンチコヴォ村とその住人』を中心に論じた修論の抜粋を報告する。

はじめに、アフェクトとは、強烈な感情、言葉や認識に先立つ情動を意味する。テクノロジーの発達に伴い、脳神経学等において生きた人間や生物の感情(アフェクト)を研究の対象とすることが可能になった。一方、人文社会系の分野では 20 世紀末の様々な転回の一つとしてアフェクト的転回が登場する。この理論は、アフェクトを理論化し、文学理論においては理性や言語に抑圧されたものとして情動をテーマとし、文学作品への新たな理解や解釈を可能にする。しかし、文学が感情、気持ち、気分を扱ってきたのはあまりにも自明であり、誰もが感情を持つ当事者であることから、その理論化は複雑さ、困難さを極め、この理論は日本においてあまり活発に議論されてこなかったように思われる。

アフェクト的転回においてアフェクトとエモーションは対概念とされ、エモーションは言葉によって名づけられ、分類されるが、アフェクトはその言葉による抑圧から逃れる感情とされる。近代心理学と近代小説の両制度が共犯的に、エモーションを個人の内面に属するものとみなしたことを明らかにしながら、本研究では近代以降の主体の境界をアフェクトから問いただし、ドストエフスキー作品の新たな解釈を試みた。

一つ目は『弱い心』(1849年)である。近代小説における過剰な風景描写に、風景と心理/内面を疎外する過剰性＝アフェクトを見いだす論を応用して、ドストエフスキー作品には少ない印象的な風景描写が描かれる『弱い心』を分析した。この短編におけるネヴァ川の光景は、主人公アルカーヂーの心理の投影を阻むほどの過剰さが描かれている。この風景はアルカーヂーの心理描写でもその心理の投影でもなく、もう一人の主人公のワーシャの心臓から流れ出る血であると指摘した。ドストエフスキーの作品では、登場人物たちは他者との強い融合志向を持っている。そのため、ネヴァ川の風景を赤い血で染め、ある気分を共有し、自己と他者の境界を壊して一体になったと論じた。

二つ目は『ステパンチコヴォ村とその住人』(1859年)である。アフェクトの特性の一つである間主観性に注目し、都会から切り離され閉塞された田舎という場において、様々なアフェクトが現れていることを予測した。従来の研究では、フォマの暴君としての人物造形に焦点が当てられてきた。しかし、「人間関係」においてアフェクトが生れ出ることから、本研究ではフォマと他の登場人物との関係性を分析し、フォマのトラウマ、そのトラウマの解消、フォマの欲望を他の登場人物と結びつけて指摘した。結論として、言語/文学による傷を受けたフォマが治癒するには、ロスタネフという生身の他者が必要であったことを論じた。本発表では『ステパンチコヴォ村とその住人』の分析について主に発表する予定である。

【研究発表会 報告要旨】 (修士論文成果報告部門)

ガルシンの戦争作品群における人々の苦しみの研究

濱田 玲央 (東大院)

本発表で報告するのは、報告者が2021年度に東京大学へ提出した修士論文「ガルシン戦争作品群における人々の苦しみの分析」の要点である。

ガルシン(1855-1888)は汎スラヴ主義思想の強い影響を受け、露土戦争に志願兵として参戦した経験を持つ。処女作の『四日間』(1877)に始まり、晩年の『信号』(1887)に至るまで、しばしば従軍経験を持つ主人公たちが登場し、戦争との関わりが描かれる。そのような作品はガルシンの創作全体の3割弱を占める。ガルシンにとって、戦争は常に重要な文学的課題であった。

ガルシンの戦争作品群の主人公たちは、ペテルブルク市民と地方の農民に大別されるが、全てごく普通の人間たちに過ぎず、職業軍人や歴史的人物などはいない。主人公たちは全て一兵卒として、元の生活を離れて戦争に参加する。ガルシンは徹底して、それまでの日常生活では戦争と無縁であった民衆の立場から、戦争を描き出した。

特筆すべき点は全ての戦争作品において必ず、少しずつ異なる形で、登場人物たちの深い苦しみが表れる事である。それらの苦しみは、出征する主人公たちの苦悩や葛藤だけに留まらず、故郷に残される恋人や家族の悲しみにも及ぶ。戦争とは日常の生活空間に打ち込まれた楔であり、それまでの暮らしを一変させる。すなわち人々のそれまでの関係性に大きな断絶を作り、不可避的な苦しみを生む。ガルシンはこの戦争が引き起こす人々の苦しみの問題を、様々な角度から常に厳しく問い続けたのである。

修士論文では人々の苦しみの問題の分析に際して、まずはそれらを具体的に明らかにする為に、語り・登場人物の姓名・主人公の境遇と出征の経緯・出来事の時系列・主人公の戦争の結末という論点を設定し、構造分析を行った。

そして次に登場人物たちの苦しみの問題を小浜逸郎『倫理の起源』(2019)を参考に分析した。

『倫理の起源』において小浜は、関係論的な人間観や日常生活の実感を汲み上げる和辻哲郎の『倫理学』を基にし、新たな倫理学を提起した。小浜は人間関係の基本モード「性愛」「友情」「家族」「職業」「个体生命」「公共性」を設定する。これらのモードに優劣や発展段階はない。すべてが個人のうちに絡み合い連関し、時には矛盾相剋しながら現われ、それ自体が大きな倫理的問題となる事を論じた。ガルシンが常に民衆の日常生活から離れることなく、戦争が契機となった人間同士の関係から生じる苦しみを描き出しているからこそ、小浜の研究はガルシンの戦争作品群における苦しみの問題に迫る有効な手掛かりとなる。

本発表会では、小浜倫理学を用いたガルシンの戦争作品群の分析に特に重点を置いて、報告する。

【研究発表会 報告要旨】 (修士論文成果報告部門)

映画におけるニコライ二世の表象とその社会的受容——アメリカとロシアの比較——

土田真紀子 (東外大院博士前期課程修了)

本発表では2021年度に提出した同名の修士論文に基づき、ロシア革命勃発後から現代までに制作されたソ連/ロシア映画、および同時期にアメリカで制作された映像作品を分析し、ニコライ二世とその家族の表象がどのようなものであったか、またその表象にはどのような社会的背景が影響していたかを明確にする。

ロシアでは2016年に文化省が「2030年までの期間における国の戦略的文化政策」を掲げており、ロシアが豊かな文化や歴史を有する国家であるということを国際社会にアピールするための材料として、映画やテレビドラマなどの映像メディアが重要視されている。ロマノフ家、特にニコライ二世一家という題材は、ロシアの文化と歴史の両方を表現することが可能であるとともに、ロシア国外の観客にも比較的なじみが深く、世界の観客に向けて「ロシア・イメージ」を提供する重要なモチーフであるといえる。

ニコライ二世とその家族は2000年にロシア正教会で列聖されており、ソ連の崩壊によって失われた「ロシア人のアイデンティティ」の新たな一形態として大衆の注目を集めてきた。『マチルダ 禁断の恋』(2017年)において皇帝の愛人関係を描くその内容が社会的な注目を集めたことから、人々の関心が依然として高いことがみてとれる。

ソ連・ロシア映画におけるニコライ二世の表象は、社会の動きに合わせて絶えず変化し続けたとともに、アメリカとの文化交流の影響を強く受けていた。革命直後から「雪どけ」の時期においては、スターリン政権下での沈黙の期間はあれども、「社会主義プロパガンダ」というイデオロギーを重視する形式でニコライ表象が行われた。しかしながら1971年のアメリカ映画『ニコライとアレクサンドラ』公開以降のソ連/ロシア映画には、皇帝ニコライ二世の「人間性」への注目や皇女・皇太子視点の物語構成など、それまでにアメリカで公開された映画の内容に呼応するような特徴がみられるようになった。

アメリカ映画に関しては、ニコライ二世よりもアナスタシアやラスプーチンなどを取り上げた娯楽性の高い作品が多い。興行的成功を目指すために主題がパターン化しており、いわゆる東側世界の観客を想定していない作風であるともいえるが、こうした「エキゾチックなロシア」像を表現する役割を担っていたのは、革命後にアメリカへ亡命してきたロシア人の映画作家らであった。このことから、アメリカ映画はむしろソ連/ロシアと深い結びつきを持ちつづけてきたことが読み取れる。

前述のように、長らくは「先のアメリカ映画を参照の上でソ連/ロシアが描くニコライ像」という構図がみられたが、2019年にアメリカで制作されたNetflixドラマ『ラスト・ツァーリ ロマノフ家の終焉』のクレジットでは、同作がロシア映画の『マチルダ』を参照していることが明らかにされている。今後は両国ともにより広い視野で国際市場に意識を傾けつつ、アメリカはよりロシアの作品から影響を受け、ロシアはアメリカ的な演出を肯定的に取り入れていくことも考えられるだろう。

【研究発表会 報告要旨】 (修士論文成果報告部門)

詩人の再出立——ボリス・ポプラフスキイ「ヤルタからの出立」をめぐって

沖 隼斗 (早大院)

本発表の目的は、ボリス・ポプラフスキイ (1903–1935) の詩篇「ヤルタからの出立」(1920) を、1920 年前後の詩人自身の伝記的事項や 1930 年代の詩論と関連づけることで、詩人の出立／再出立を主題とする詩篇として解釈してゆくことである。また、この詩篇が冒頭に置かれる予定であった詩集『雪の時』の「あり得べかりし本」としての性格の一端を明らかにすることである。

「ヤルタからの出立」(以下、「出立」と略記)の初出は、1965 年に出版された詩集『航路不明の飛行船』であるが、詩篇末尾に「1920 年」とは記されておらず、「1920 年」と初めて記されたのは、詩人自身の 6 巻の作品集の構想メモに基づいて編集された 2009 年刊行の作品集においてである。また「出立」が詩集『雪の時』の冒頭に置かれたのもこの作品集においてであり、1936 年に出版された『雪の時』に「出立」は収録すらされていなかった。この構想からは詩人が習作と判断したと思しいモスクワ時代やパリ移住前の詩篇は除外されており、またほぼ編年体で構想されているがゆえに、1931 年から 1934 年までの詩篇を収録している『雪の時』の冒頭に「出立」が置かれているのは二重に奇妙であり、なぜ『雪の時』の冒頭に「出立」が置かれるのか、またそれによって『雪の時』が一冊の本としてどのような性格を持つことになるのか、この二点を考えねばならない。

「出立」はこれまで亡命作家のクリミアを題材とするテキストの一つとして解釈されてきた。しかし「出立」は、故国との別離を単に描写しているのではなく、むしろこの亡命によってどのように詩人が誕生し、またそれをキリスト教的なモチーフと結びつけ、亡命を「死と新生」として描写することで、「詩人としての」出立を主題化している。

以上のような「出立」の主題は、1930 年代のポプラフスキイの詩論「若手亡命文学における神秘的な雰囲気について」(1930) と関連づけて解釈することができる。この詩論では「出立」とのモチーフの共通性(「憐れみ」や滅びゆく者、白軍兵士とパリの亡命者ボヘミヤンとのアナロジー等)を読み取ることができ、この詩論の論旨に基づけば、「出立」は詩人の誕生だけでなく、「憐れみの相」である文学の誕生をも主題化した詩篇であると解釈できるのである。

1920 年と付された詩篇「出立」はポプラフスキイ自身の作品集の構想において、1931 年以後の詩篇で構成された詩集『雪の時』の冒頭に収録される予定だった。その意図は、詩人自身の出立を原点として再認識し、1930 年代からの再出立とその歴史性を詩集に付与するためと考えられる。

【研究発表会 報告要旨】 (修士論文成果報告部門)

イーゴリ・ホーリンの初期バラック詩篇における語りの問題

金丸 駿 (早大院)

本発表では、昨年度提出の修士論文「イーゴリ・ホーリンの詩作における抒情的主体の変容について」から、その第二章の内容に相当する、ホーリンの初期バラック詩篇における語りの問題について報告する。

モスクワの非公式芸術サークル「リアノゾヴォ・グループ」の詩人イーゴリ・セルゲーエヴィチ・ホーリン (Игорь Сергеевич Холин, 1920–1999) の 1940–50 年代にかけて書かれた詩集『バラックの住人たち Жители барака』および『抒情詩なき抒情詩 Лирика без лирики』に代表される初期詩篇、いわゆる「バラック詩篇」は、当時バラック地帯であったリアノゾヴォの生活を描写した作品として知られている。

先行研究において、バラック詩篇はグロテスクかつ不条理的なバラックの世界を描写した作品として評価され、その客観的・自然主義的な描写は「記録的性格」として定義されてきた。しかし、このような性格づけは詩篇の内容に着目してなされたものであり、このときその形式的側面はほとんど閑却されている。しかし、記録的性格をその形式的側面、とりわけ語りの問題から再検討することによって、記録的性格という表現では取りこぼされてしまう、無人称的な語りというものへの在り方を指摘することができる。

また、先行研究のなかには、バラック詩篇において散見される、単純な押韻をもつ簡素な四行詩という詩形が、チャストゥーシカのそれと類似していることなどから、その「チャストゥーシカ性」を指摘するものも少なくない。この性質は上述の記録的性格とは異なる問題として別個に語られることが多かったが、語りの問題という観点からであれば、両者を同一の問題意識のもとに考察することが可能である。そのような考察によって、バラック詩篇の読解がより有機的になるとともに、内容的側面よった考察からは十分に汲みだすことのできなかつた、アイロニーの問題を抽出することが可能となる。

このアイロニーの問題は、バラックという主題から離れた 60 年代以降の詩篇においても顕著に見出すことができる。とりわけ作者／語り手／(抒情的) 主体それぞれの位相の曖昧・不分明を遊戯的に示した詩集『ホーリン Холин』やコンクリート・ポエトリーとの類縁性が認められる長詩『地球が死んだ Умер Земной Шар』において、アイロニーの問題はいよいよ避けがたく立ち現れる。

以上のように、アイロニーはホーリンの詩作全体において認められる重要な問題であるわけだが、それと同時に、当時のソヴィエトにおけるバラックの意義やバラックで詩作をすることの意味を考えるうえでも、きわめて重要な位置を占めることになる。ひるがえって、そのような視点から初期バラック詩篇に注目することで、ホーリンの文学史的意義を措定することもまた可能となる。

【研究発表会 報告要旨】 (修士論文成果報告部門)ジラルールの欲望の三角理論およびジジェクとクリステヴァの精神分析理論から見る
ロマン・ポランスキー作品の研究

藍 孟昱 (創価大院)

ロマン・ポランスキーは処女作『水の中のナイフ』製作後、ポーランドを離れ、その後ハリウッドに進出した。アメリカを追放された後はヨーロッパで映画を制作し始め、越境的な監督と見做されている。彼の映画に関するこれまでの研究は個別作品を扱うものが多く見受けられる。ポランスキーの映画の全体像をつかもうとする D.Caputo の研究があるが、それは撮影技法を R.Gregory の間接的能動的な知覚モデルと結びつけ、映画におけるミステリー要素の視覚的効果を説明しようとするもので、映画制作上の監督の意思については重点が置かれるものの、物語構造や人物配置などに関する分析は十分に話されていないと考えられる。

本修士論文では、ルネ・ジラルール (René Girard) の欲望の三角理論、及びスラヴォイ・ジジェク (Slavoj Žižek) とジュリア・クリステヴァ (Julia Kristeva) の精神分析理論 (いわばラカンのいう現実界・想像界・象徴界の関係) の視点を援用し、前期作品の『水の中のナイフ』『反撥』『袋小路』、およびその後「アパートメント三部作」と「捜査シリーズ」と呼ばれる作品の中の『チャイナタウン』『フランチック』『ナインスゲート』『ゴーストライター』を主に扱って分析を行い、その人物構造、物語構造、テーマ、モチーフについて考察した。本報告では『水の中のナイフ』を中心に論じる。処女作『水の中のナイフ』は二人の男性の権力 (女性がその具体的な対象として) をめぐる争いをテーマとし、これらの人物の三角関係はジラルールの欲望の三角理論によって説明できる。すなわち主体の対象への欲望は媒体 (その第三者は同じく対象を欲する) によって引き起こされる。ラカンの精神分析理論を援用すると、主体は外傷的な象徴界と遭遇することによって現実界の見えないはずの恐怖に直面し、それまで信じてきた「現実」が崩壊に至るが、同時に新たな外傷が認識された「現実」が取って代わるメビウスの輪のような構造が読み取れる (スラヴォイ・ジジェク、『斜めから見る』、鈴木晶訳、青土社)。この構造はロマン・ポランスキーの多くの映画作品に読み取ることができ、本発表で扱う作品においてはいずれも集団・社会的秩序と個人の対立が描かれる。その上、ポランスキー作品において終焉を迎える主人公は常に権力の場を失って無力化する (ラストシーンのカメラワークが主人公から目を逸らすことも、その表れだと考えられる)。『水の中のナイフ』のみならず、『袋小路』、アパートメント三部作、調査シリーズにおいても、外傷的な象徴界に遭遇して精神的に崩壊するという点において共通の要素が見受けられる。

【研究発表会 報告要旨】 (博士論文成果報告部門)

20世紀初頭のロシアにおける女性向け大衆小説とジェンダー

安野 直 (早大)

この発表では、私が提出した博士学位論文「〈性〉の境界を読み解く——20世紀初頭のロシアにおける女性向け大衆小説とジェンダー」をベースに、20世紀初頭のロシアにおける文学作品のなかで、既存の「男／女」の秩序におさまらない非規範的な〈性〉の諸相がいかにも示され、またそうした表象を支える原理がいかなるものであったのかを明らかにする。

具体的には、20世紀初頭のロシアで都市のミドルクラスの女性たちに人気を博した、アナスタシヤ・ヴェルビツカヤ(1861-1928)、エヴドキヤ・ナグロツカヤ(1866-1930)、リディヤ・チャールスカヤ(1875-1937)によって著された大衆小説を考察の対象とし、これらの作品が、いかなる方法を用いて非規範的な〈性〉のあり方を呈示し、「男／女」や「異性愛／同性愛」といった境界に向き合ったのかを探っていく。20世紀初頭に流行した女性向け大衆小説には、類型化された男女の性をめぐる言説や表象で充溢しているがゆえに、20世紀初頭のロシアにおける「男／女」に収まらない〈性〉のありようがどのように表象されていたのかを問ううえで、もっとも適していると言えるだろう。

女性向け大衆小説には、時代の進歩的女性像である「新しい女性」にくわえ、現代で言うところの「LGBTQ」に相当する同性愛や性役割の反転した人物形象などの〈性〉の表象が、いっぽうで既存の規範から逸脱しつつ、他方で「男／女」や「異性愛／同性愛」の境界を強化するという矛盾をかかえながら、書誌雑誌や広告をとおして広く言論の場に流通した。さらにその際、作家たちは女性嫌悪的な思想や性科学といった支配的な言説を用いて「男性的な女性」や「男性同性愛者」を造形しつつ、密かに規範から逸脱する密猟的戦術を採った。たしかに女性向け大衆小説は、ジェンダー(女性)とジャンル(大衆)という点において「弱者」ではあったが、「強者」の権力的秩序を奇貨として利用することによって、規範やヒエラルキーを転覆する力をもったのである。

女性向け大衆小説に描かれる非規範的〈性〉とは、異様なまでに性について語り、男女を二つに分類し、「異常」とされる性を放擲する近代的セクシュアリティ観によって生み出されたものであるといえよう。しかし同時、そうした作品にあらわれる多様なセクシュアリティを含んだ描写は規範的なものから排除されてきたものであり、それらは、いわば近代の「鬼子」としてジェンダー秩序を内破する力を持ったのである。

【規約・執行部】

日本ロシア文学会関東支部規約

1988年10月5日制定・支部登録

2017年6月最終修正

- 第1条 本支部は日本ロシア文学会関東支部と称する。
- 第2条 本支部は日本ロシア文学会の会則に基づいて、その目的達成のために独自に次のような事業を行う。
(1)共同の研究ならびに調査。(2)研究発表会・講演会の開催。
(3)機関誌の発行。(4)その他本支部の目的を達成するために必要な事業。
- 第3条 本支部は原則として、関東地方および新潟県在住の日本ロシア文学会会員をもって組織する。
- 第4条 本支部について次の機関をおく。
(1)総会 (2)運営委員会
- 第5条 総会は本支部の最高議決機関であり、毎年1回開催するものとする。ただし必要に応じて臨時総会を開くことができる。総会の議決は出席会員の過半数によって成立する。
- 第6条 運営委員会は支部長と運営委員をもって構成し、支部の運営にあたる。
- 第7条 本支部に次の役員をおく。
(1)支部長 (2)運営委員 (3)事務局長 (4)監事
- 第8条 支部長は支部選出の理事の互選により選出する。
- 第9条 支部長は本支部を代表し、支部の運営を統轄する。
- 第10条 運営委員は、別に定める選出規定により選出する。
- 第11条 運営委員は、運営委員会を構成し、支部の運営を分担する。
- 第12条 事務局長は、支部事務局担当大学選出の運営委員とし、会計・事務を担当する。
- 第13条 監事は、別に定める選出規定により選出する。
- 第14条 監事は、年度末に会計監査を行い、総会でその報告を行う。
- 第15条 役員の任期は2年とし、重任を妨げない。
- 第16条 本支部の経費は会費、補助金その他の収入をもってこれにあてる。
- 第17条 会費に関する規定は別に定める。
- 第18条 本支部は、事務局をおき、本支部の会計および事務全般を委ねる。事務局設置の規定は別に定める。
- 第19条 運営委員会は毎年決算報告を作成し、総会の承認を求めなければならない。
- 第20条 本支部の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日をもって終わる。
- 第21条 本規約の改正および諸規定、内規の制定・改正は総会の議決による。

支部規約に関わる規定

- 1) 第10条に関わる運営委員選出規定
支部事務局分担大学所属会員、および関東地方と新潟県にある日本ロシア文学会事務局分担大学所属会員がそれぞれの大学から1名の委員を選出したのち、支部長とそれら委員が上記大学所属会員以外から若干名選出する。

- 2) 第 13 条に関わる監事選出規定
監事は、支部会員から 2 名を支部長が指名するものとする。
- 3) 第 15 条に関わる会費規定
年額 1000 円とする。会費の改訂は支部総会の承認を要するものとする。
- 4) 第 16 条に関わる事務局設置規定
支部事務局は、関東地方と新潟県にある大学のうち、原則として所属会員が 2 名以上いる大学が協議の上、もちまわりで適宜順番を決め、2 年ずつ担当する。ただし日本ロシア文学会事務局分担大学はこの限りでない。
- 5) 第 8 条に関わる理事候補選出規定
支部選出の理事候補については、支部総会で承認を受けた選挙管理委員会が選挙を実施する。支部選出分 14 名のうち、10 名は選挙結果に基づいて選び、4 名は支部長が運営委員会の承認を得た上で指名するものとする。ただし、選挙結果によって選ばれる 10 名分については、三期連続の選出（過去の支部長指名枠での選出を含め）を認めない。なお、この規定は 2017 年度の理事選挙から適用される。

現行執行部

支部長： 沼野恭子

運営委員： 秋山真一、朝妻恵里子、大森雅子、加藤百合、寒河江光徳、佐藤千登勢、
鈴木正美、野中進、乗松亨平、前田和泉、八木君人

事務局長： 八木君人

監事： 朝妻恵里子、乗松亨平

